

## 女子大学生のスタディ・スキルと パーソナリティに関する研究(2)

### —— 因果関係の検討 ——

田 頭 穂 積

近年、学校の授業が分からないという子どもの比率は、小学校から高校へと学年が進むにつれて増えるといわれているが、文部省の調査によって、全国レベルの実態がはじめて明らかにされた(毎日新聞、1998年11月13日付)。辰野(1993)によると、アメリカ合衆国では、1960年代大学教育の大衆化以降、大学教育についていけない学生が増大し、スタディ・スキルの研究に関心もたれるようになってきた。スタディ・スキルは、学習方略、要点の把握、学習時間の配分や計画の立て方、学習の習慣、学習態度などのスキルの総称である。そのようなスキルが身につけていない学生へのスタディ・スキルの教育は、アメリカでは大学における重要なカウンセリング活動の一つとみなされている。鳴澤(1986)は、学校カウンセラーの学生相談活動として、不適応の相談だけではなく、一般学生の精神的健康の維持・増進・予防活動も重要であり、その一環として「基本的学習技能の診断と訓練」を位置づけている。しかし、わが国では10数年経た現在でも、カウンセリング活動の主要な業務の一つとして展開されていないといっても過言ではないであろう。伊藤・中村(1998)は、スクールカウンセラーと中学校教師を対象に、学校教育活動への役割について調査している。学習方法、進学指導、授業方法、学習意欲・態度などの〈学業進路指導〉の因子について、「スクールカウンセラーとしてどの程度関わるべきか」とたずねたところ、スクールカウンセラーよりも教師群が肯定的であった。教育関係機関に所属するスクールカウンセラーにおいても、スタディ・スキルなどの学習方法についてカウンセリングすることは、カウンセラーの役割としてあまり認識されていないものと思われる。

さて、知識の記憶・理解、学習方略などについては、認知心理学的な基礎的アプローチが行なわれているが、一方では学習指導にも積極的に応用していこうという試みもなされてきた(Gagné, 1985; Pressley, 1995)。また、学習方略を調べる検査を用いて、学業成績の予測や、個人の勉強の仕方(study practice)に関するカウンセリングなども行なわれてきた(Weinstein, et al., 1988)。近年、市川(1989, 1991, 1993, 1998)は、認知カウンセリング(cognitive counseling)という実践的研究活動を提唱している。これは、教科学習の内容とか勉強の仕方が分からなくて困っている人に、個人的な面接を通じて、分からない状態の背後にある理解できない認

知的原因を探り、〈わかる〉ようになることをめざす援助活動である。認知カウンセリングは、純粹に知的な問題を取り扱う点で、通常のカウンセリングや認知療法とは異なる。学習内容の分からない状態が続けば無気力感を伴い、学校への不適応や不登校を生じることが懸念される。下山・曾我部（1985）によると、スタディ・スキルの学習は、自己効力感や達成感などを高め、ポジティブな効果をもたらすことが期待される。

林（1981,1982）は、Brown（1965）のスタディ・スキル質問紙検査 Study Skills Surveys を翻訳して、わが国の大学生のスタディ・スキルについて研究している。林によると、この質問紙検査は、アメリカ合衆国における学生用スタディ・スキル質問紙として代表的なものであり、〈学習場面〉〈学習方法〉〈学習動機〉の三つの下位尺度からスタディ・スキルの評価をするようになっている。田頭（1995）は、林（1981）の質問紙を用いて、大学生におけるスタディ・スキルとパーソナリティの関連性を検討した。〈学習場面〉〈学習動機〉のスタディ・スキル尺度は、EPPS 性格検査の7つの特性と関連性があったが、スタディ・スキルが関与すると思われる〈学習方法〉の尺度とはまったく関連が認められなかった。そこで、田頭（1997）はBrown（1965）の3尺度60項目からなるスタディ・スキル質問紙検査を再検討した。因子分析の結果、Brown（1965）の質問紙検査は、実際には40項目、9因子から構成されていることが明らかになった。それらの因子を列挙すると、〈要点の理解〉〈学習意欲〉〈学習の動機〉〈学習の計画〉〈学習の妨げ〉〈進路〉〈学習の仕方〉〈学習の環境〉〈先生との接触〉であった。田頭（1997）によると、スタディ・スキルの9因子の中で最も困難なスキルは、学習の時間配分やスケジュールの立て方などの〈学習の計画〉である。机の上や身のまわりの物理的な〈学習の環境〉を整えるスキルよりもはるかに難しい。Zimmermann（1998）も、学校での学習に、学習者の自己制御スキルが重要であると述べている。従って、このようなセルフコントロールを要するスタディ・スキルには、パーソナリティが何らかの関与をすることが推測されよう。

一方、下山・曾我部（1985）の学習意欲の構造モデルによると、個人の基本的傾性と学習への方向づけが学習意欲を構成し、それが特徴的な学習行動となって表れる。彼は、個人の基本的傾性として動機やパーソナリティをあげている。学習意欲が直接に影響するのは学習活動であり、スタディ・スキルが十分に習得されていない場合には、学業成績はなかなか上がらないことになる。従って、スタディ・スキルの表出には、パーソナリティ特性が個人差として反映するものと仮定できよう。

従来、大学生のスタディ・スキルとパーソナリティの関係については、モーズレイ性格検査を用いて神経症的傾向との関連性を検討したもの（林・滝本, 1981; 林, 1982; 林・塚本, 1984）や、EPPS 性格検査を用いて動機的側面から検討したもの（田頭, 1995, 1997）、矢田部・ギルフォード性格検査を用いて情意的側面から検討したもの（田頭, 1998）がある。これらはいずれもパーソナリティとスタディ・スキルの相関的な研究であり、因果関係を捉えたものではない。本研究では、パーソナリティの特性がスタディ・スキル行動をどのように規定しているのか、矢田部・ギルフォード

ド (Y-G) 性格検査を用いてパーソナリティの情動的側面との関連性を検討する。またEPPS性格検査を用いて動機的側面との関連性も併せて検討することを目的とする。

## 方 法

**対象** 女子大学生76名を調査対象とした。

**調査用紙** スタディ・スキルを測定するために、林 (1981) が翻訳した Study Skills Surveys (Brown,1965) の調査用紙を用いた。林の調査用紙は、学習場面、学習方法、学習動機の下位尺度からなる計60の質問項目で構成 (田頭, 1995参照) されていたが、本調査では田頭 (1997) が精選したスタディ・スキル尺度 (40項目) を用いた。また、回答方法が、2件法から5件法 (「かなりそうである」～「まったくそうでない」) に修正された。質問項目は、B5版の用紙に印刷され、冊子形式で呈示された。なお、調査の意図を察せられないようにするために、表紙には「学生生活の意識調査」と記入されていた。

パーソナリティ・テストには、矢田部・ギルフォード性格検査と日本版EPPS性格検査の2種類を用いた。矢田部・ギルフォード性格検査〈一般用〉 (以下、Y-G性格検査と略す) は、12のパーソナリティ特性 (抑うつ性、気分の変化、劣等感、神経質、主観的、非協調的、攻撃的、活動的、のんき、思考的外向、支配性、社会的外向) からなる、市販のテスト用紙であった。尺度項目は各10項目で構成されており、「はい」「?」「いいえ」の3件法で回答するようになっていた。また、EPPS性格検査〈大学・一般用〉 (以下、EPPS性格検査と略す) は、15の社会的動機 (達成、追従、秩序、顕示、自律、親和、他者認知、救護、支配、内罰、養護、変化、持久、異性愛、攻撃) から構成されている、市販のテスト用紙であった。回答は、対にして呈示される2つの動機のいずれかを選択させるものであった。

**手続き** 性格検査は、手引の実施法に従って、授業中に集団で一斉に行なわれた。最初に行われたY-G性格検査では、質問項目がほぼ一定の速度で読み上げられ、回答するように求められた。翌週、EPPS性格検査が行われた。その2週間後に、スタディ・スキルの調査が集団で実施された。スタディ・スキル調査の実施にあたっては、「各項目について、いつもの自分に一致するかどうかを判断して、あてはまる回答の番号に○印をつけてください。どのようにしなければならぬかというのではなく、現実かどうかということで答えてください。」と教示した。

**結果の処理** Y-G性格検査における各パーソナリティ特性の得点には、手引 (辻岡, 1979) の採点法に基づいて得られる粗点を用いた。各パーソナリティ特性の得点の分布は、0点から20点の範囲となり、得点が高くなるほどその尺度の傾向が強いことを示す。また、EPPS性格検査における各社会的動機の得点にも、手引きの採点法に基づいて得られる尺度の粗点を用いた。各パーソナ

ティ特性の得点の分布は、0点から28点の範囲となり、得点が高くなるほどその傾向が強いことを示す。一方、スタディ・スキル調査は、ネガティブな内容の質問項目から構成されていたので、「かなりそうである」を1点、「まったくそうでない」を5点に変換して得点化した。従って、得点が高くなるほどスタディ・スキルが優れていることを示す。

## 結果および考察

スタディ・スキルとパーソナリティ特性の関連性を検討するために、以下のような分析を行なった。まず、スタディ・スキル得点に基づいて群分けを行なった。各対象者ごとにスタディ・スキル得点の平均を算出し、全体のスタディ・スキル得点を求めたところ、平均 ( $M$ ) が2.98、標準偏差 ( $SD$ ) が0.36となった。これを基に、得点が  $M+0.5SD$  以上の高スタディ・スキル群 (以下、H群と略す) に21名、中スタディ・スキル群 (以下、M群と略す) に34名、得点が  $M-0.5SD$  以下の低スタディ・スキル群 (以下、L群と略す) に21名を振り分けた。

### スタディ・スキルとY-G性格検査との関連性

スタディ・スキルとY-G性格検査との関連性を検討するために、Y-G性格検査の12下位尺度を説明変数に、スタディ・スキル得点を基準変数にして、全体、H群、M群、L群のそれぞれにおいて変数減少法による重回帰分析を行なった (Table 1)。ただし、Table 1には、重回帰式が1%水準および5%水準で有意となる説明変数の標準偏回帰係数を記載してある。

Table 1 スタディ・スキルに影響を及ぼすY-G下位尺度の重回帰分析

説明変数	基準変数			
	スタディ・スキル			
	全体	H群	M群	L群
抑うつ性				0.74+
気分の変化	-0.25*			-0.46
劣等感		-0.90**		
神経質	-0.34*	0.28		
主観的	0.14	0.28		
非協調的			0.33*	
攻撃的	0.19	-0.20	0.26	
活動的	0.24+			0.38
のんき	-0.25+			-0.32
思考的外向		-0.49+		
支配性	0.14	0.42		0.41
社会的外向		-0.40		
重相関係数 ( $R$ )	0.59	0.79	0.45	0.59

\*\* $p<0.01$  \* $p<0.05$  + $p<0.1$  (数値は標準偏回帰係数)

全体的にみると、スタディ・スキルは、Y-G性格検査の下位尺度「神経質」「気分の変化」と有意な負の関連性が認められた。また、「活動的」とは関連性に正の傾向、「のんき」とは負の傾向があった。田頭（1998）は、Y-G 下位尺度とスタディ・スキル全体平均との相関について報告している。それによると、スタディ・スキル得点が高いほど、神経質でなく、気分の変化・劣等感・抑うつ性などの尺度得点が低かった。また、スタディ・スキルと「神経質」の相関が  $r = -.43$ 、「気分の変化」が  $r = -.39$ 、「劣等感」が  $r = -.38$ 、「抑うつ性」が  $r = -.36$ 、「主観的」が  $r = -.26$ 、「非協調的」が  $r = -.26$ と有意な負の係数を示している。これらの尺度のうち前方の4つは、Y-G性格検査の情緒的安定の因子を構成するパーソナリティ特性である。しかし、重回帰分析の結果から、「神経質」（ $\beta = -0.34$ ）と「気分の変化」（ $\beta = -0.25$ ）がスタディ・スキルと有意に深い関連性をもち、特に「神経質」の尺度が強い影響を与えているといえる。情緒的安定の因子のなかの、「神経質」「気分の変化」が少ないほどスタディ・スキルは高くなるといえよう。また、「のんき」「活動的」の標準偏回帰係数に傾向（それぞれ  $\beta = -0.25$ と $0.24$ ）があることから、よく考えて行動する非衝動的な傾向や、てきぱきと物事をかたづける行動特徴もスタディ・スキルと多少関連している。

スタディ・スキル得点の高低群別に、スタディ・スキルの全体平均得点とY-G 下位尺度得点との関係を見ると、H群においては、「劣等感」が有意な負の影響（ $\beta = -0.90$ ）を及ぼしており、「思考的外向」とは関連性に負の傾向があった。「劣等感」のないことが、スタディ・スキルにきわめて高い影響を及ぼしているといえる。M群においては、「非協調的」の尺度だけに有意な正の関連性が見られた。L群では「抑うつ性」にだけ正の傾向があり、スタディ・スキルへの抑うつ性の影響が若干認められる。以上のように、スタディ・スキルを高低別に分けて分析したが、各群に共通した、特定のパーソナリティ特性とスタディ・スキルとの関連性はなかった。

#### スタディ・スキルと EPPS 性格検査との関連性

まず、スタディ・スキル群間のパーソナリティ特性得点を比較するために、EPPS性格検査の下位尺度別に1要因の分散分析を行なった。その結果、「攻撃」において片側検定で有意差（ $F=2.67$ ,  $df=2/75$ ,  $p<.05$ ），ならびに「達成」「変化」「内罰」の特性において片側検定で傾向（それぞれ  $F=2.32$ ,  $F=2.03$ ,  $F=1.91$  ;  $df=2/75$ ,  $p<.10$ ）がみられた。そこでEPPS下位尺度別にチューキの多重比較（ $p<.10$ ）を行なった。「攻撃」「内罰」の尺度では、H群<M群=L群の順に得点が高い傾向があった。また、「達成」の尺度では、H群>M群=L群の傾向がみられた。「変化」の尺度では、H群=M群>L群の傾向がみられた。以上の結果から、H群は、M群やL群よりも「攻撃」「内罰」の得点が低く、また、L群よりも「達成」「変化」で高い傾向があるといえる。

次に、Y-G性格検査の場合と同様に、スタディ・スキルと EPPS 性格検査との関連性を検討するために、EPPS 性格検査の15下位尺度を説明変数に、スタディ・スキル得点を基準変数にして、全体、H群、M群、L群のそれぞれにおいて変数減少法による重回帰分析を行なった（Table 2）。

ただし、Table 2 には、重回帰式が1%水準および5%水準で有意となる説明変数の標準偏回帰係数を記載してある。

Table 2 スタディ・スキルに影響を及ぼす EPPS 下位尺度の重回帰分析

説明変数	基準変数			
	全体	スタディ・スキル		
		H群	M群	L群
達成	0.22+	0.15		
追従			0.18	
秩序	0.28**	0.48**		
顕示	-0.21*		-0.33+	
自律	-0.18		-0.50**	0.79**
親和			0.22	1.88***
他者認知				0.49*
救護			-0.57**	1.29***
支配	0.13	0.59***	-0.53**	
内罰		-0.31*	-0.53**	
養護			-0.48**	-0.42
変化	0.37**			
持久	-0.14			0.76*
異性愛		-0.27+	-0.41**	
攻撃				0.60*
重相関係数(R)	0.47	0.87	0.74	0.85

\*\*\* $p < 0.001$  \*\* $p < 0.01$  \* $p < 0.05$  + $p < 0.1$  (数値は標準偏回帰係数)

全体的にみると、スタディ・スキルは、EPPS性格検査の下位尺度「変化」( $\beta = 0.37$ )、「秩序」( $\beta = 0.28$ )と有意な正の関連性、「達成」に傾向があった。また、「顕示」とは負の関連性( $\beta = -0.21$ )があった。スタディ・スキル得点の高低群別に、スタディ・スキルの全体平均得点とEPPS下位尺度得点との関係を見ると、H群においては、「支配」「秩序」が有意な正の影響(それぞれ $\beta = 0.59$ と $0.48$ )を及ぼしており、「内罰」とは負の関連性( $\beta = -0.31$ )があった。M群においては、「救護」「内罰」「支配」など15尺度のうち約半数に負の関連性が見られた。L群では「親和」「救護」「自律」などに正の関連性が認められた。以上のようにスタディ・スキルを高低別に分析したところ、スタディ・スキルの群間に共通してみられた動機的特性としては、H群とM群間の「支配」「内罰」「異性愛」があった。また、M群とL群間では、スタディ・スキルと「救護」の関連性が逆であった。「自律」も同様であった。一般的にスタディ・スキルの高い人は、新しいことをやってみようという「変化」の動機が強いけれども、仕事は計画的で生活も規則正しく「秩序」を保ち、困難なことを「達成」しようとする。また、自信があるので、人から認めてもらいたいという「顕示」欲も強くなく、失敗しても「内罰的」にならない。人を「支配」しようとするが、感情も統制し「攻撃的」にならない。そして、「異性愛」よりも学習への関心が高い。一方、スタディ・スキルの低い人は、学習よりも人と仲良くしたいという「親和」の欲求が高く、自分の思いどおりに

「自律的」に行動するが、うまくいかないときには「攻撃的」になったり、助けてもらいたいという依存的な「救護」の動機が強いといえよう。

大学生のスタディ・スキルとパーソナリティの関係について概観すると、モーズレイ性格検査を用いて神経症的傾向との関連性を検討した研究(林・滝本,1981 ; 林,1982 )や、テスト不安との関連性(林・塚本, 1984)をみたものがある。林・滝本(1981)は、学習習慣、学習態度とモーズレイ性格検査の関係を検討したところ、外向性の者が、内向性の者に比べて学習活動や学習環境に対して積極的傾向を示した。また、神経症的傾向の高い者は、低い者に比べ、内的緊張のもたらす葛藤のために、学習に対する積極的取り組みが抑制されると述べている。また、林(1982)は、スタディ・スキルとモーズレイ性格検査の神経症的傾向との間に負の相関を認めている。本研究は、林・滝本(1981)や林(1982)の結果と基本的に同様であった。一般的にスタディ・スキルの背景には、神経質でなく、気分の変化が小さく、情緒が安定しているというパーソナリティの情意的特性が寄与している。またスタディ・スキル高群においては、劣等感のないことがスタディ・スキルを規定しているといえる。また動機を自分で統制できるために、落ち着いて、学習課題に集中して取り組むことができ、よい成績をあげやすくなると考えられる。それがまた新たな課題へ取り組みを促進させることになる。Zimmermann(1998)の自己制御学習の循環モデルと同様な働きが存在することが示唆される。スタディ・スキルの実行に際しては、その背後にパーソナリティの情意的・動機的な関連性があることが示されたので、スタディ・スキルのカウンセリングにおいては、成績の改善に繋げるためにスタディ・スキルだけを学習させようとしなが大切である。しかし、カウンセリングにおいてスタディ・スキルが改善されれば、学習に対する認知の仕方が変化し、パーソナリティも変容していく可能性があるであろう。ただ、スタディ・スキルの高い人は学業成績がよいのか、また、成績がよいから情緒が安定しているのかは、実際の学習成績との検討がされていないので、ここでは結論づけることはできない。本研究では、大学生のスタディ・スキルについて、背後に潜むパーソナリティとの関連性を検討したが、今後、さらに成績との関連性についても検討されなければならないであろう。

## 引用文献

- Brown, W. F. 1965 *Study Skills Surveys*. San Marcos, TX: Effective Study Materials.
- ガニエ, E.D. 赤堀侃司・岸学(監訳) 1989 学習指導と認知心理学 パーソナルメディア。  
(Gagné, E. D. 1985 *The cognitive psychology of school learning*. Glenview, Illinois : Scott,Foresman,and Company.)
- 林 潔 1981 大学生の Learning skills の調査 白梅学園短期大学紀要, 17, 9 - 20.
- 林 潔 1982 学生の Study skills について 相談学研究, 15, 10 - 21.

- 林 潔・滝本孝雄 1981 大学生の学習習慣, 学習態度の構造と性格傾向との対応 相談学研究, 13, 70 - 78.
- 林 潔・塚本嘉寿 1985 大学生の学習上の問題と処置 埼玉大学紀要(総合篇), 3, 25 - 36.
- 市川伸一 1989 認知カウンセリングの構想と展開 心理学評論, 32, 421-437.
- 市川伸一 1991 実践的認知研究としての「認知カウンセリング」 箱田祐司(編) 認知科学のフロンティア I サイエンス社 Pp.134-163.
- 市川伸一(編) 1993 学習を支える認知カウンセリング -心理学と教育の新たな接点- ブレーン出版
- 市川伸一(編) 1998 認知心理学から見た学習方法の相談と指導 ブレーン出版
- 伊藤美奈子・中村 健 1998 学校現場へのスクールカウンセラー導入についての意識調査-中学校教師とカウンセラーを対象に- 教育心理学研究, 46, 121-130.
- 鳴澤 實(編) 1986 学生・生徒相談入門 川島書店
- Pressley, M., Woloshyn, V., & Associates. 1995 Cognitive strategy instruction that really improves children's academic performance (2nd ed.). Cambridge, MA : Brookline Books .
- 下山 剛・曾我部和宏 1985 意欲欠如児の診断と治療 藤原喜悦・高野清純・稲村 博(編) 学習不振児の診断と治療 教育出版 Pp.193 - 211.
- 田頭穂積 1995 大学生におけるスタディ・スキルとパーソナリティ特性の関係 広島文教女子大学教育相談センター年報 2, 49 - 61.
- 田頭穂積 1997 大学生におけるスタディ・スキル構造とパーソナリティの関係 広島文教女子大学教育相談センター年報 4, 27 - 36.
- 田頭穂積 1998 女子大学生のスタディ・スキルとパーソナリティに関する研究  
- Y-G性格検査との関連 - 広島文教女子大学教育相談センター年報 6, 37 - 44.
- 辰野千壽 1993 学習適応検査 岡堂哲雄(編) 増補新版・心理検査学 - 臨床心理査定の基本- 垣内出版 Pp.621 - 635.
- 辻岡美延 1979 新性格検査法 - Y-G性格検査実施・応用・研究手引 - 日本・心理テスト研究所.
- Weinstein, C.E., Zimmermann, S.A., and Palmer, D.R. 1988 Assessing learning strategies: The design and development of the LASSI. In C.E.Weinstein, E.T.Goetz, & P.A.Alexander(Eds.), *Learning and study strategies: Issues in assessment, instruction, and evaluation*. San Diego, CA: Academic Press. Pp.25 - 40.
- Zimmermann, B. J. 1998 Academic studying and the development of personal skill : A self-regulatory perspective. *Educational Psychologist*, 33, 73-86.